様式1 # 令和7年度　山梨県立笛吹高等学校評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

学校目標・経営方針	◎自己の可能性を信じ，何事にも主体的にチャレンジする生徒の育成 ◎広い視野をもち，地域社会の形成にすすんで参画できる生徒の育成

山梨県立笛吹高等学校校長　廣　瀬　志　保

本年度の重点目標	1．魅力ある授業の工夫をとおして，学習意欲の向上と確かな学力の定着をはかる。
	2．日々の教育活動をとおして，良好な人間関係と規範意識の醸成をはかる。
	3．生徒個々の希望と適性に応じた進路の実現をはかる。
	4．笛吹市との包括連携等を活かして，地域課題に取り組む意識と行動力を育てる。
	5．教職員の多忙化改善に向けた取り組みを行う。

達成度	
A	ほぼ達成できた。（8割以上）
B	概ね達成できた。（6割以上）
C	不十分である。（4割以上）
D	達成できなかった。（4割未満）

評価	
4	良くできている。
3	できている。
2	あまりできていない。
1	できていない。

自　己　評　価

番号	評価項目（本年度の重点目標）	具体的方策（本年度の重点目標）	方策の評価指標（本年度の重点目標）	自己評価結果（年度末評価（令和8年2月1日現在））	達成度	成果と次年度への課題・改善策（年度末評価）
1	生徒への教育の質を保証する（生徒理解に努めながら学習意欲の向上と確かな学力の定着をはかり、魅力ある授業づくりに向けた授業改善の工夫）	◎学び続ける教員による授業の充実を図る ・山梨スタンダードに基づいた授業実践により「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善に取り組む。（ICTの利活用を行う） ・相互授業参観や授業研究、教員研修を通じて、教員の授業力向上に努める。 ・やまなし教員育成指標に基づき常に学び続けることを意識し、自己研鑽に努める。	・授業アンケート ・ICTの活用状況	○学習支援ツールとしてのClassiの活用においては、ポートフォリオ機能を積極的に活用することで、生徒の学びの軌跡を記録し、自己省察することができた。一方で、各教科の個別最適な学びを実践する。 ○教科横断型・STEAM型の新教科の設定を通して、生徒の言語能力や問題発見・解決能力といった学習の基盤となる力の育成を目指した。地域の材を生かし、現実社会におけるリアルな課題に向き合う環境を整えたことは、一定の成果と言える。一方でその効果を発揮させるための授業設計や評価方法について、さらなる工夫と改善の余地があると感じられた。 ○DXハイスクール事業を活用し、個別学習や協働学習の充実を図り情報活用能力の向上を目指したが、生徒の習熟度の差に応じた教材提示や、協働場面における効果的なICT活用については、継続的な検証と改善が必要である。 ○「FFグローカル」においては、対話と協働を重視しており、生徒が所属する4学科それぞれの特色をが際立つように工夫した。	B	○ICTの活用については、グロースナビを導入することで、、Classi, 今未来手帳で行ってきた振り返りと成果の蓄積を継続するとともに、個別最適な学びやキャリアデザインを支援する学習ツールとしての活用を行っていく。 ○教科横断型STEAM型の探究的な学びを、FFグローカルを軸として各教科につなげる。各教科での授業研究に加え、相互授業参観や職員研修による各教科の取り組みの共有によって、教科、学科を越えた学校全体としての授業改善の体制を整える。 ○校内で参観してもよい授業を提示したことによって、授業参観しやすい雰囲気作りができたと感じている。一方で、まだ、自覚的に授業改善を進めているとは言い難い状況がある。 ○校内研修は、研究開発運営指導委員の協力を得て、次期学習指導要領の方向性や、学習評価について理解を深めたので、これをいかに実践につなげたかを検証する必要がある。
		◎生徒の家庭学習の推進を図る ・生徒が自己の生活を見つめ、主体的に家庭学習に取り組むことができるよう、ICT学習支援ツールと今未来手帳の活用に取り組む。	・BLEND、Teams、Classi、今未来手帳の活用状況			
		◎個別最適な学びと協働的な学びの実現を図る ・教科横断型STEAM型の新教科を設定し、生徒に言語能力、問題発見・解決能力など学習の基盤となる資質・能力を育成することを目指す。 ・DXハイスクールの事業を生かして、個別学習や協働学習を通して情報活用能力を高める。 ・4学科の特徴を生かし、生徒一人一人に応じた学びが実現できる教科やカリキュラム開発を行う。	・相互授業参観の状況 ・カリキュラムデザインの進捗状況			
2	生徒が安心安全な学校生活を送ることができる学習環境をつくる（良好な人間関係と規範意識の醸成を目指した、日常的な教育活動の工夫）	◎いじめの未然防止に努める ・いじめ調査に併せ、生活実態の把握に努め、予防的な指導の充実を図る。	・教職員間の情報共有 ・保護者との情報共有と情報発信	○月1回のいじめ対策委員会、週1回の木一会議を通じて、課題を抱えている生徒の情報共有を行い、担任、学年、教育相談等の組織ぐるみでの生徒対応が丁寧に適切に行われている。いじめアンケートに挙がってくる諸課題に関しても被害生徒、加害生徒に寄り添った指導配慮が行われ、時間がかかる事案もあるが、改善に向けての指導が継続的になされている。 ○今年度、生徒の安心・安全面で配慮を要する事案が発生した。安心・安全な学校づくりのため指導を継続しているが、今後も危機管理の醸成を促すとともに、互いに嫌な思いをしない学級環境づくりを徹底していきたい。 ○本校には、様々な支援を必要とする生徒が在籍しており、職員会議での情報共有や多くの先生方からの声かけ、また、外部支援の活用など、個人の特性に配慮した指導がなされている。	B	○人間関係のトラブルなどは多々起こりうるが、常日頃から道徳教育を意識した学級経営や行事運営を促し、生徒が安心・安全な学校生活を送ることのできる環境づくりを促したい。 ○次年度も引き続き、危機管理マニュアル・点検項目の明確化と、学期ごとの校内研修で危機管理意識を高めていきたい。 ○支援が必要な生徒が増加する中、教員間での情報共有は行われているが、支援内容の一貫性・継続性に課題が残るので、このことについて学年・分掌で共有する仕組みを強化していきたい。
		◎担任、副担任の連携・協力によるホームルーム指導を実施するとともに学校全体で情報共有を図り、組織としての適切な対応に努める ・生徒一人一人が抱える課題に着目し、個性を認め、個別の発達を支援するホームルーム活動を行う。 ・学校全体で情報を共有する体制を整備し、組織的な対応を行う。	・朝の読書の実施及び道徳教材の活用 ・登校指導の実施 ・学年・学科集会など様々な場面での指導			
		◎生徒の安心安全な学校生活を確保する ・授業、クラブ活動、登下校など学校生活全般における生徒の安心安全を確保する。	・学校生活の充実感 ・教育相談の充実 ・危機管理の徹底			
3	進路指導を充実させ、生徒の進路実現を図る（各々の適性に応じた進路を実現）	◎習熟クラス、少人数授業等編成目標に応じた学習指導を行い、進路実現を図る	・相互授業参観の状況 ・指導と評価の一体化	○普通科において少人数の習熟度別授業を展開し、学習内容の定着を図った。○基礎的な学力が問われる場面が増えたため、知識の定着がより図れるように、家庭学習時間の確保を目指して取り組みを工夫しようとした。○昨年度の反省を踏まえ、より実効性のある進路指導を図るため、各学期ごとにCareer Dayを実施し、生徒が自己のキャリア形成に向けて考える機会の充実を図った。○振り返りを通して自己理解を深めるポートフォリオの取組を常習化したことで、意識を高く持って行動できるようになった。○外部と連携した進路ガイダンスの実施や笛吹市と連携した就職説明会など、自己のキャリア選択につながる多様な学習の機会を増やした。生徒は意欲的に参加し、自らの進路の理解と関心を深めることができた。進路ガイダンスを有効に活用して進路選択につなげていく生徒も多かった。○3年生の進路指導には全教職員を挙げて、きめ細かい指導体制を組み、学校全体で行うことができている。○生徒アンケートでは長期休業課外に多くの支持を得ることができた。目的と内容を明確にし、更なる充実に取り組んでいく。○Classiのポートフォリオを通した双方向でのコミュニケーションも浸透し、生徒個々の適性の把握や進路実現にきめ細かく対応できるよう、二者懇談、三者懇談を充実させた。	B	○生徒が基礎的・基本的な知識、技能を身につけるとともに、実生活でも活用できるよう、確かな学力を学校全体で育成する場面や活動を検討する。○各教科ごとの取組を教科横断したものにするために、シラバスの共有や情報発信の機会を模索することが求められる。R8年度は基礎力の定着に向けた活動を通して職員の共通理解を図りたい。○土曜講座や長期休業課外等は、生徒・保護者からの期待が大きい反面、部活動との両立もあり、運用面で課題が多い。受講対象や目的をより明確にし、学習の質の充実を図る。○Classiのポートフォリオ機能で蓄積したものを生かし、自己理解を深めさせるとともに進路選択時の指針のとして生かせるような指導につなげていく。○「キャリアデザイン」につなげていくためにも、多様な外部団体と連携した学習機会を充実させ、多角的に物事を思考し、主体的に行動する生徒の育成につなげる。○進路に関する情報発信をICT機器を活用して強化し、が生徒・保護者がキャリアデザインについて話題にする働きかけを強化していきたい。
		◎生徒、保護者の意向を調査・把握し、進路希望を実現するための具体的な手立てを講じる ・生徒や保護者への情報提供を充実させ、進路意識や目的意識を高める。	・二者懇談・三者懇談の実施状況 ・各種便り，HP等の充実			
		◎課外授業や課外指導の充実を図る ・土曜講座、長期休業課外、小論文講座、各種検定など生徒のニーズに応じた学習機会を設け、積極的な参加を促す。	・多様な学習機会の提供			
		◎進路行事や総合的な探究の時間等を通してキャリア教育の体系化を図る ・「総合的な探究の時間」「課題研究」「FFグローカル」での探究活動を通して、外部機関等と連携しながら効果的なキャリア教育を行う。	・計画的な進路ガイダンスの実施 ・地域社会への関心度			
4	これからの時代を生きる生徒に必要な資質・能力を育成する。（具体的な学習の場面において、学んだことを積極的に生かし、他者と連携・協働しながら課題解決する力を育む）	◎生徒が地域の課題発見・解決に主体的に関わり、社会参画できる実践的な活動を行い成就感や自己肯定感を高める	・総合的な探究の時間の充実 ・学校運営協議会との連携による活動	○「FFグローカル」では、地域の方との対話を重視し、実際に地域に出て自ら課題にアプローチする姿が見られた。実際に、生徒の振り返りでは、フィールドワークを受け入れてくださった地域の方々から温かい言葉をかけられたこと、自分自身が地域の役に立ったと実感する言葉が見られている。この実現には、学校運営協議会による、学校と地域の橋渡しが非常に大きな影響を与えていると考える。 ○今年度は「フェスタ笛吹」が開催されず、生徒が地域住民と直接交流し、活動成果を発信する場が限定されたことは課題として残った。地域とつながる実践の機会を多角的に確保する必要がある。	B	○一人一人の興味関心に応じた学びを提供してきた一方で、複数の担当から別々に依頼を出していたり、逆に外部からそれぞれに連絡を受けているようなことがあった。こうしたやり取りをスムーズに進めるために、連絡事項の共有をしたりい、窓口を一本化したりする工夫が求められる。 ○来年度は、「フェスタ笛吹」の開催を含め年間を通じて地域と関わる継続的な実践の場を、今以上に充実して整備できるよう取り組みたい。
		◎学校行事を通じ、地域社会の一員としての所属感や連帯感をさらに強く持てるよう育成する	・生徒会活動の充実 ・広報活動の充実 ・笛吹市との包括連携による活動			
5	教職員の多忙化改善に向けた取り組みを行う	◎業務の平準化を図る ・会議等の効率化、行事・分掌の見直しを行う。	・会議や行事の精選	○マナーアップ運動の学年分散化や規模縮小を通して朝の時間外勤務を少しではあるが軽減することができた。 ○今年度は指導体制の適正化を目的に、学校として部活動数の削減を行った。今後も生徒数は減少するので、持続可能な運営体制を確立するために、引き続き統合や外部資源の活用を進めながら、教育的効果を確保した活動の充実を図っていく。	B	○次年度は学校独自のマナーアップ運動に移行し、教職員の負担軽減につなげていきたい。 ○部活動について、外部指導者の確保や地域資源の活用について、連携体制の構築や予算面での検討が必要である。生徒数減少が進む中で、残存する部の活動水準や生徒の学習・生活とのバランスをどのように確保するかが課題となる。
		◎部活指導の適正化を推進する ・年間指導計画に基づく、適正な部活指導を実践する。	・部活動の実施状況と活性化			

学校関係者評価

実施日　（令和8年2月20日）

評価	意見・要望等
	○「FFグローカル」での探究活動や小中との連携をはじめ地域と密接に連携し、多様な取組を着実に推進している点を高く評価している。「今未来手帳の活用」は教職員の評価が低い状況である。保護者との連携は重要なことであるのでこのことについては、様々な方法を模索していき改善をと考える。 ○地域の課題をグローバルな視点で探究する活動を行っていると思う。これまでの活動を生かす中で、企業、行政区、市役所などから、困りごとを「依頼」として受け、解決案を提案するなどの「地域課題の受託型探究」に取り組めるのではないかと考える。また、市役所の各課（教育総務・学校教育・生涯学習・文化財・図書館）の専門性を生かし、地域連携の内容に応じて担当職員の派遣やコーディネートを行うなど、学校と地域をつなぐ取組ができると考える。 ○生徒減少における学科編成は学校の魅力向上に直結する重要な転換点である。公立高校の定員割れが進む中で、笛吹高校として明確な方向性を示す必要性がある。また、高校無償化の影響で私学志向が強まる現状を踏まえ、公立としての価値や特色を打ち出すべきであり、編成方針は地域の期待に応えられるものであるべきで、県教委と連携しながら学校として生徒が魅力を感じられる体制を整えることが重要だと述べた。
	○自己肯定感を高める教育の影響もあり、生徒が"間違えること"を極端に恐れ、否定される経験を避けようとする結果、対話や意見交換の中で本音を出せず、誤解が生まれやすい状況がある。特に、失敗を避けて「無難にやり過ごす」姿勢は、仲間との関係づくりにもマイナスに働き、相互理解や信頼関係の構築を妨げていると感じる。「対話の力」「その場で丁寧に関係を修復する力」「相手の立場に立つ思考」が今こそ必要であり、授業や学校生活のさまざまな場面で育てていくべき。 ○より良い人間関係を育むためには、生徒自身が自分の弱点を避けるのではなく、生徒が自分の力で問題に向き合い、失敗しながら成長できる機会を丁寧に設けることが重要である。個の尊重と公共性のバランスを育むため、協働活動や対話の機会を増やし、相手の立場を想像する指導を計画的に行ってほしい。 ○安心安全な学校づくりには、学校・家庭・行政・警察・地域の多面的な連携が不可欠であり、「ストレスマネジメント」等の講演会の実施は評価できる。
	○ICT活用については、Classiのような学習支援ツールは、生徒の学習履歴や振り返りを記録し、自分の成長を可視化する点では非常に価値がある。 ○「教材提示が一律で生徒の習熟度の違いに十分対応できていない」「協働学習の場面でICTが効果的に使い切れていない」との具体的な課題もある。ICTは道具であり、目的に応じた活用方法が授業側に明確に設計されてこそ、生徒の個別最適な学びや主体的な協働につながると考える。 ○ICTツールで蓄積されるポートフォリオや学習履歴、日々の振り返りは、生徒自身の成長記録として機能するだけでなく、教員が生徒のつまずきや頑張りを把握するための大切な情報源となるとした。また、BLENDのように教員からの連絡や生徒の提出物、相談内容を一元的に扱えるツールは、保護者にとって「学校の様子が見える化される」安心感につながるので効果的に活用してほしい。
	○地域の学校（小学校・中学校）との連携を密に、学生が教える出前授業や、一緒に活動するイベントやスポーツ等の合同練習など地域に即した取り組みに加え、全国には、特色のある部活動等のPRにより募集に寄与できれば良いと思います。 ○探究活動等において、地域協働推進員の方々にも協力いただき、地域との連携を強化した。地域側には「高校生とつながりたい」という強いニーズがあり、学校・JA・地元団体が相談しながら柔軟に連携できる体制が重要である。
	○教員の業務量が依然として過大であり、授業後に部活動指導や保護者対応が続くことで、結局は退勤後に事務作業を行わざるを得ない構造が深刻である。この状況では、教員が生徒と丁寧に向き合う余裕が失われ、学校の教育力にも影響する。「バックオフィス的役割」の強化や業務の分担、情報共有システムの整備などにより、教員が本来の教育活動に集中できる環境づくりが必要だと考える。

留意点　（1）重点目標と評価項目については，各学校の現状と課題に基づき，実情に合わせて重点化し，設定する。
（2）学校関係者評価については，年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し，評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは，最終回の学校評価委員会等を開催し，学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。